

《研究ノート》

## ダリエン計画について (On Darien Project)

渡 辺 邦 博

ダリエン計画とは、イングランドとスコットランドとの対抗の歴史において、ちょうど17世紀が18世紀に転換しようとする時（末尾の年表を参照）に、長らくイングランドへの経済的従属を甘受してきたスコットランドが、その苦境を脱するために乗り出した国家的な企画のことである。

カリブ海と太平洋の狭い結節点である、中南米のパナマ地峡に商業植民地を獲得すると言う大胆な計画は、ウィリアム・パターソン（Paterson, William, 1658~1719）のアイデアであった。彼はダムフリースのスキップミアで生まれたが、ほとんどイングランドで育てられ、著名な企画家で投資家となってロンドンに居を定めるまで、西インドとヨーロッパ大陸に交互に住んだ。彼は「名誉」革命の熱烈な支持者であった。と言うのも、彼はそれが、商業的な企画を増大させる時代を拓くものだとの希望をかけていたからである。この目的のため、彼は1694年にイングランド銀行の立ち上げに手を貸し、数多くのプロジェクトを支持・援助した。彼は手始めに、自ら西インドで収集した情報にもとづいて、1694年にダリエン計画に着手した。

その構想は、ダリエン地峡に植民地を建設し、大西洋と太平洋との間の交易を陸路で遂行しようとする会社を設置することであった。このような方法によって、ヨーロッパとアジア間の全取引が喜望峰を経由する

ルートから進路が転換されると、彼は考えた。自国スコットランドが、当時東洋の富を取引する大商業の中心であったオランダにとって代わることができると考えたのである。計画の評価を明らかにすることなく、彼は同郷人たちを説得して投機的な利害関心を刺激して、新会社を設置する法令をスコットランド議会で通過させた。

大陸でのその支持者を得ることは失敗したけれども、1695年にはアフリカとインドとの貿易を行なうスコットランド会社が創設された。この企ての推進に対する貢献で、彼はサルトーンのアンドルー・フレッチャー<sup>(注1)</sup>と密接な関係となり、パターソンは、スコットランド議会法によって会社に付与され大きな責任に関与することになったのである。

その会社は、アジア、アフリカ、ならびにアメリカ貿易を独占する権限を3年間に渡って与えられ、砂糖とタバコを除く2年間の輸出については、完全に免税を許されていた。スコットランド人たちは、争って自分たちのなけなしの貯蓄をこの新たな企てに投資して、名目上は40万ポンドの資本がつぎ込まれた。ただし、前述のように当時のスコットランドは貧しく、その計画が財政上で成功するかどうかは、ただイングランドの援助の望みがあるかどうかにかかっていた。

---

(1) サルトーンのアンドルー・フレッチャー (Fletcher, Andrew, of Saltoun, 1655-1716) は、グレート・ブリテン連合王国が成立する前後のスコットランドで重要な役割を果たした政治家。辞書的に言えば、スコットランドの愛国者、反合邦派の政治家、さらに著述家となる。18世紀の後半に綺羅星のように活躍するいわゆるスコットランド啓蒙を準備した一人である。彼は、後にソールズベリーの主教となったギルバート・バーネットの教えを受けた。

イーストロウジアン<sup>(1)</sup>の判事であった彼は、専制的な王政復古体制に対抗し、1681年に亡命、1684年に亡命謀反人として法的な保護を剥奪され、1688年オレンジ公ウィリアムと共に帰国したが、謀反人として法益を剥奪された。1686年には、1685年にモンマスの反乱で果たした役割により欠席裁判で死刑の判決を受けた。帰国に際して、財産没収の撤回が遅れたため、1689年の議会 (Convention of Estates) には

選出されなかった。しかし彼はスコットランド政府の急進的改革を求める反対派を支持した。

彼はまた1660年と1663年のイングランドによる航海条例の打撃を受けた母国スコットランド経済の改善に骨を折った。その後、スコットランド貿易を活性化すべく1695年に提案された「スコットランド会社」の創設を手助けした。ウィリアム・パターソンのダリエン計画を援助し、実現しようとするこの会社の試みが1700年に水泡に帰すと、スコットランドに大騒動が惹き起ったが、その2年前に祖国の窮状を憂慮する『二つの論説』を出版していたフレッチャーは、ダリエンの失敗と同様にスコットランドの苦境の主たる原因は、王冠連合の結果にあるとすることを確信したのだった。

ジェームズ2世の後継者問題は、以上の諸困難を解決する道を示唆した。もしもスコットランドの苦境が軽減されずに、さらに相続人が見つからないままアン女王が死亡するような事態起こると、スコットランドとイングランドとは別々の道を歩むことになる。1702—03年には合邦に対する身の入らない試みが挫折してしまったが、その時スコットランド議会は、ハノーバー朝の王位継承を1703年に受け入れるか、あるいは、王権によって遂行されるイングランドの主導権に逆らい、スコットランドはスコットランドの苦境が軽減されるまで、王位継承の議論を拒否するかを選択を迫られたのだった。フレッチャーは、彼の連携する若手とともに、その議論を主導したが、その後彼の議会への影響は減少した。激しい論争の末、合邦条約が合意をみた。フレッチャーや同盟者たちによる継続的な反対にもかかわらず、なかなか手際のよい賄賂の助けによって、1707年1月16日にスコットランド議会で承認、イングランド議会を速やかに通過、1707年5月1日に条約は法的効力を持つこととなった。この結果「グレート・ブリテン」は、外交上の概念から離れて、基本法上現実味を帯びたものとなった。

フレッチャーは断じてこの合邦を承認しなかった。スコットランドにとって致命的なものとなしたのである。彼は1708年フランスが侵入した際に逮捕されたが、無罪放免となった。なぜなら、彼の亡命スチュアート朝に対する敵意は減少したわけではなかったからであった。生涯にわたる王権神授説反対者論者の彼は、基本法上での制限君主制の主唱者であった。エписコパリアン（監督協会派）として育ったとは言え、彼の関心は教義に拘束されないという点で際立っており、多くの点で彼は啓蒙の思想を先取りしていた。彼の考えによれば、政治を左右するのは、政治科学であって、神学ではない。学識の深い著述家であった彼は、英語をマスターした最初のスコットランド人の一人であった。腐敗した利己主義の時代にあって彼の並々ならぬ純粹さによって、彼の記憶が古びたものとなることはない。

信念のある独身者の彼は、その甥のミルトンのアンドルー・フレッチャーによって継承された。皮肉なことに甥は、ミルトン卿として、第3代アーガイル公のスコットランド「経営」を助けることとなった。つまり、サルトーンのアンドルー・フレッチャーが憎んだ腐敗に基づいたシステムに訴えることとなったのである。

パターソンは落胆したところだが、残念ながら、当初スコットランド会社はダリエン計画に手を出さず、「ダリエン会社」との名称は看板に偽りがあることにもなった。元来この会社は、スコットランドに支配権があったとは言え、スコットランドだけでなく、イングランドの投資を確保する目的を持つものだった。イングランドに利害を持つ多くの商人たちは、イングランドの大特権会社によって、金のなる木のアフリカやインド貿易から排除されていたのである。この会社に対する応募がイングランドでもスコットランドでも盛んとなったが、スコットランドの銀行を育成することは、スコットランド会社が競合的な銀行集団となる危惧から、冷淡で、敵対的な状態に留まった。

その計画そのものは、通常判明するように、そう杜撰なものではなかった。その目的は、今日パナマ地峡として知られている地域であるダリエンに、植民地「ニュー・カレドニア」を建設することであった。「ニュー・カレドニア」は、望むらくは、ふたつの大海の貿易を支配下に置いて、自由で豊かな商業の中心地となるはずであった。その構想は、狭い地峡を横切って運搬することによって、カリブ（あるいは、北側の海）と太平洋（ないし、南側の海）を結び付けると言う単純なことにあって、筋書き通りに行けば、南米の先端であるホーン岬をまわるような、長時間を要して、かつ暴風雨に曝される航海を避け、広大な交易を創り出すはずの、素晴らしいアイデアなのであった。ダリエンこそは、貧困のどん底にあるスコットランドを壮大で豊かな商業の中心地とすると期待された。だが、会社は、様々な諸困難を考慮に入れてはいなかった。

1698年、パターソンとその妻を含め、およそ1200名の入植者が、エディンバラ郊外のリースの港からダリエンに向けて出帆、かの地に「ニュー・カレドニア」の名称で土地の公式の領有を行い、原住民酋長との間

で協定を締結して、議会を設置し、彼らの首都としての「ニュー・エディンバラ」の防衛を開始した。その計画は、向こう見ずと言う点では、ほとんど常識を外れていた。問題の地峡は、およそ2世紀ほど前にスペイン人によって発見され、横断されていたが、ヨーロッパ人がそこに居住するにはあまりに不健康な状態だったので、スペイン人はそこに住み着くのに失敗した。しかしスペイン人は、自分たちのアメリカにおける「神の意思」の中心に外国人が侵入するのを黙って見すごすことは決してなかったので、疫病が原因で多数の死亡者を出した残りがニューヨークに出奔した時、居留民を放逐するため遠征隊が選抜された。この恐ろしいニュースがスコットランドに届く前に、ダリエンに向けて第二次遠征隊が出帆したが、彼らがそこに到達したのは、第一次入植者たちが撤収した4ヶ月後であって、そこで彼らが見たのは、ただ放棄されて廃墟と化した「ニュー・エディンバラ」だけであった。失望から回復を促すために新たな入植者が上陸したけれども、彼らが遭遇したのは、意見が対立して、疫病にかかるという運命であった。そうした状況にスペイン人の艦隊が到着して、生き残った者たちに降伏と本国への帰還を強制したのである。この不幸な事業がイングランドとスコットランドとの間に醸し出した感情のもつれと、事態への誤解のおそれが、最終的に1707年に成し遂げられた二国間の議会の合同と言う案への推進力となったと考えられている。

他面でイングランドの東インド会社は、イングランド議会に対して、イングランドの利害集団が「スコットランド会社」から投資を引き揚げるよう急がせるように嵐のような請願を行った。同様に敵意のある受け止め方がオランダでも生じて、失望したパターソンたちが支持を求める交渉のため、オランダに派遣されもした。ウィリアム王の代理人、ポール・ライコー卿の介入を恐れて、スコットランド会社は、あれかこれか

を慮り、パターソンのダリエン会社を取り上げることとなった。パターソン自身が1698年に中央アメリカへ最初に乗り出すべく舟出したが、彼には経験が不足しており、数多くの失敗の原因となったので、植民地関係者たちに対する彼の影響力はほとんど発揮できなかったのであった。

この困難に対して、当時極めて疲弊した状態にあったスペインは、ウィリアム王の外交的な駆け引きを通じた間接的な意味合いを除けば、必ずしも大きなものではなかった。スペインの反目をうまわわって恐るべきことは、ダリエンの手の付けられないような地形にあった。その岩だらけの山塊、水蒸気の多い熱帯雨林、おそらくそれ以上何にも劣らず耐えられないものが、悪疫を発生させる気候であった。ダリエン計画のようなものは、すでに植民地化と世界貿易に経験を持つ、イングランドのような物量を兼ね備えた海軍国ならば、おそらく、パターソンの夢を実現するのに成功したかも知れないが、スコットランドの力量に対しては荷が重過ぎたのである。しかしながら、イングランドの関与、ないしはスコットランドに対する援助でさえもが、直系の継承者を持たないスペインのシャルル2世の死に対して、ルイ14世がスペインの全面的継承権を手に入れるのを阻止しようとする、ウィリアム王による外交術の要請によって左右されたのであった。

したがって、イングランドは、スコットランドによるダリエン事業会社には友好的ではなくなった。合わせて三つの遠征隊がスコットランドから派遣された。スペインの抵抗は脆弱だったから、1700年2月15日スペイン人はトゥーバカンチでフォーナブのキャンブル大尉に敗北した。戦力に優勢なスペイン艦隊が、「ニュー・カレドニア」を包囲して、1700年4月迄に熱病と食糧不足により、スコットランド人は降伏を余儀なくされたのであった。

「ニュー・カレドニア」の破滅とスコットランド会社の崩壊は、甚大な影響力を持った。スコットランドの流動性の大半が失われたことによって、スコットランドの経済状況が悪化しただけでなく、経済的苦境に加えて王位継承をも絡んだスコットランドとイングランド議会間の国家構造上の対立を惹き起こし、究極的には、この対立によって1707年の『合同』に向かうことになったのである。

しかし、ダリエン計画はまやかしではなかった。パターソンは、妻と子供たちのみならず、その事業によってかなりの金額を失った。事実彼はその事業と自由貿易と言う考え方の虜であった。財政に関する彼の考えも、スコットランドにおいて、正貨に結び付かない紙幣を提案したジョン・ローに対する、1705年の巧みな対抗策によって立証されたように、彼の時代にあっては、健全な内容を持っていた。大西洋と太平洋の連結に関する彼の夢は、その後関心の対象となった。彼は運河が実現可能だと信じてはいたが、これは1913年にパナマ運河の開通によって、究極的には実現を見たのである。<sup>(注2)</sup>

---

(2) ダリエン計画の中心人物ウィリアム・パターソン(1658-1719)は、イングランド銀行の創設者にして、不運だったダリエン計画の立案者であった。彼は不換紙幣の強力な反対論者であり、1717年の減債基金を示唆した人物だとみなされる。彼は重商主義体系に反対して、自由貿易の最も早い時期の主張者の一人であったとされる。

彼は、植民地の自治政府に関する啓蒙的な考えを保持していたし、交易に関する書物を提供する公立図書館の創設を提案した。ダリエン会社の失敗で破滅したけれども、1715年には議会によって、18000ポンドを超える交付金を受けた。パターソンの記憶や仕事は、S. パニスターによる粘り強い努力によって、偏見や不明瞭から救済された。

参考文献

Higgs, Henry, ed., 1923-1926. *Palgrave's Dictionary of Political Economy*, 3 vols. London: Macmillan & Co.

Lynch, Michael, 2001. *Companion to Scottish History*, Edinburgh.



## ダリエン計画・関係年表

1603	エリザベス1世逝去、ジェイムズ6世、イングランドとアイルランド王としてロンドンに赴く。
1606	王は両国の連合強化を提案、イングランド議会は反対。長老派のアンドルー・メルヴィルがロンドン塔に幽閉される。
1610	主教制の成立。
1617	ジェイムズ6世のスコットランド訪問。パースの5か条提案。
1625	ジェイムズ6世逝去、チャールズ1世即位。「廃棄法」
1628	イングランド『権利の請願』
1633	チャールズ1世のスコットランド訪問。
1637	新祈祷書の導入、セイント・ジャイルズでの反乱。
1638	国民契約成立、グラーズゴウ教会総会、主教制と「パース5か条」の廃止、長老主義的教会統治再建。
1639	第一次主教戦争。
1640	第二次主教戦争、スコットランド議会改革の進行。
1641	第二回目のチャールズ1世スコットランド訪問、議会改革の進展。
1642	イングランドの内乱、スコットランド軍内乱鎮圧の派兵。
1643	「神聖な同盟と契約」
1644	スコットランド軍イングランドの内乱に参入、議会派によるマーストン・ムーアの勝利。モントローズ侯兵を起こす、スコットランドの分裂。
1645	イングランドでニュー・モデル軍の編成。
1646	国王チャールズ、スコットランドに投降。
1647	「約定」締結。
1648	スコットランド軍プレストンでクロムウェルに敗北、急進派「ホイッグモアの急襲」
1649	チャールズ1世の処刑。
1650	チャールズ、スコットランド訪問。クロムウェルはダンバーにスコットランド軍を破る。
1651	チャールズ2世スクーンで即位、クロムウェル、スコットランドを占領。
1658	クロムウェル死去。
1660	チャールズ2世による王政復古。
1682	アドボケイト・ライブラリー創設。
1685	チャールズⅡ世の逝去。
1688	名誉革命。
1689	権利の宣言、ウィリアムとメアりに戴冠。ウィリアム王戦争。
1690	革命戦争終結。
1692	グレンコウの虐殺。
1695	イングランド銀行定礎。スコットランド会社設立。
1696	「凶作の7年間」
1698	ダリエン植民地設立。
1700	ダリエン植民地、スペインからの攻撃を受ける。ウィリアムは見捨てる。
1702	アン女王の王位継承、アン女王戦争、スペイン継承戦争～
1703	スコットランド議会で「安全確保法」成立、両国関係は悪化。

1705	イングランド議会で「外国人法」(イングランドの申し出を認めないなら、スコットランドを外国と扱う) 成立。
1707	両国議会合併法(教会、法、教育制度は維持)
1708	ジャコバイトの上陸作戦失敗。
1712	主教派を認める「寛容法」成立。聖職推挙権の復活。
1714	アン女王逝去、ハノーバー朝ジョージ1世即位。
1715-16	ジャコバイト・マー伯の挙兵。
1719	ジェイムズ・スチュアート、スペインの援助でブリテン遠征、失敗。
1720	第2代アーガイル=ジョン・キャンブル、弟のアイレイ伯=アーチボルド・キャンブルが実権を掌握。南海泡沫事件。
1725	モルト税反対の暴動がグラズゴウで発生。
1728	エディンバラ医学校の設立。
1733	聖職推挙権への不満、スコットランド教会に穏健派が主流となる。
1736	群衆に発砲を命じたボーティアスが暴動により殺害される。
1740	ジョージ王戦争(～48)
1747	世襲裁判権の廃止。
1752	ジャコバイト所領没収委員会設置。
1755	アリゲザンダ・ウェプスタの人口調査。
1756	フレンチ・インディアン戦争(～63)
1759	チャールズ軍のブリテン侵入がギブロン湾の海戦で敗北。ファルカーク近くのカロン製鉄所定礎。
1762	第3代ビュート伯ジョン・スチュアートが、ブリテン首相となる(～63)
1767	エディンバラのニュータウン建設の礎石が置かれる。
1769	ジェイムズ・ウォット蒸気機関を改良して特許をうる。
1772	スコットランド人民の友協会設立、エア銀行の失敗。
1775	アメリカ独立戦争の開始。
1776	スミスの『国富論』出版。
1784	総選挙で小ピット勝利、同盟者メルヴィル子爵ヘンリ・ダングスがスコットランド政治の実権を握る。
1785	ニュー・ラナークにコットン・ミル操業開始。
1789	フランス革命が起きる。
1790	スコットランドではじめて水力紡績機導入。
1791	シンクレアの『スコットランド統計』開始(～98) フォース・クライド運河開業。
1793	トマス・ミュー裁判。
1796	ロバート・バーンズ死去。
1797	民兵制への反対から暴動が起こる。
1801	グレート・ブリテンとアイルランドの議会合同。
1802	『エディンバラ評論』創刊。